

## 親密性としての“性 - 愛”論の構図

中村由香<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 東京大学大学院教育学研究科 修士課程

本稿の目的は近代家族と親密圏・親密性についてのこれまでのアプローチを、近代感情現象のシンボルである“愛”の側面から整理することにある。親密圏に関する理論研究において、親密圏は近代家族と同一視されてきた。そして、近代家族間での親密性の靱帯となったのは、異性間の“性”的な関係を含意した“愛情(=恋愛)”であった。近代家族研究、ジェンダー研究などの歴史社会学研究においても、“愛”の存在は自明視され、それに対して政治的視点から評価し、変革しようという研究が蓄積されてきた。“愛”は、まさに家族社会学者やフェミニズムからの糾弾を受ける原因となってきたものの、それ自体が家族ひいては親密圏という存在の否定につながるものではない。“愛”は、“家族関係の維持”という点でもある種の安定性を持っていたと同時に、“性”という衝動的な感情を含みこむことから生じる不安定性・衝動性と共存する役割を果たしてきた。本稿では、このような“性”と“愛”の関係から、親密圏を親密たらしめる持続性の構造的内実の一端を明らかにすることで、その否定・肯定のどちらかに終始するのではない親密性概念を抽出する為のアプローチを見出そうとする。

キーワード： 親密性，愛，近代家族

### 目次

#### 1 研究の背景と目的

#### 2 社会史のアプローチ

##### 2.1 親密圏＝近代家族

##### 2.2 “性 - 愛”としての“親密性”

#### 3 家族社会学のアプローチ

##### 3.1 近代家族史と親密性評価

##### 3.2 家族の精神的靱帯としての“愛”

#### 4 フェミニズムによるアプローチ

##### 4.1 親密性批判としてのフェミニズム

##### 4.2 “愛”批判の手段としての“性”

#### 5 近代家族≠親密圏のアプローチへ

### 1 研究の背景と目的

本論文の目的は、“親密圏”あるいは“親密性”概念についてのこれまでの研究と課題を整理し、今後、どのようなアプローチによって親密性のいかなる側面が抽出される必要があるかを明確にすることにある。

近年、家族の多様化、個人化が問題視され、人と人との結びつきの必要性が至る所で提起されている。この他者との結びつき、共生の必要性は、近年の教育の動向にも顕著である。例えば、2006年に新しく公布・施行された教育基本法では愛国心や道徳性の育成が教育の目的に盛り込まれているし、“ノーマライゼーション”概念が教育界に取り込まれ、障害者と健常者の障壁を取り払おうとする試みにも明らかである。しかし、個人化、多様化に対処し、共生の理想的あり方を見出していくには、このような家族の変容がなぜ起こってきたのかを問い直す必要がある。

端的に言えば、この家族の変容の原因は、家族の神話化にあった。従来の“家族”が担わされてきたイメージは、“持続する愛をメディアとする平和な空間”であった。平和、安全を担う家族像は、実際、それがあくまでも歴史的に創られたイメージであるにも関わらず、家族のあるべき姿として普遍化され、動かし得ないものとして個人の生き方を縛るようになったのである<sup>1</sup>。

これまで、家族の個人化すなわち親密性の希薄化が問題視される一方、具体的に親密性のどのような部分に問題があるのかが明確にされず、結局、親密性そのものが短絡的に批判の対象とされてし

まう傾向があった。また、親密圏は個々人のプライベートな領域を含む為に不可侵とされる部分が多く、親密圏の当為性が疑われることも無かった。その為、親密圏・親密性は、論者によって肯定、否定のどちらかの評価が下され、それ自体が自明のものとして他の研究対象の価値尺度にされてきた感がある。

そこで本稿では、概念としての親密性と実際に家族成員間を親密にさせる諸要素との相互関係に注目し、親密性の内的構造の一端を明らかにしていく。その際、鍵概念とするのは、“性”と“愛”という行為的・感情的シンボルである。これを基に考察を進める理由は、これらのシンボルによって、何故あるいはどのように親密性の当為性が担保されてきたのかを、最も端的に象徴できると考えるからである。また、このような考察を教育学研究の俎上から位置づけるとするならば、近代教育学が前提としてきた教育的価値の再考をマクロな視点から促すものと言えよう。例えば、ルソーやコンドルセに代表される近代教育思想は、近代家族に象徴される親密性のイデオログである<sup>2</sup>ことから、家族の変容と教育的意義との関連を問い直す為の示唆が得られるのではないかと考える。

このような問題関心から、本稿では、社会史、家族史、女性史の3つのアプローチを取り上げ、それぞれを“性-愛”という軸から検討していく。2では、長らく親密圏=近代家族として捉えられてきた概念の展開を概観し、親密圏内で形成される関係性が“性”と“愛”が相互補完的になることで家族形態と結びついていたことを論じる。次に3では、家族の内部から親密性の精神的側面—“愛情”—が“性”という反社会的な行為に対して、宗教的な精神性の拠り所として機能してきたことを検討する。さらに4では、親密性の“性”的側面を注視することで親密性がイメージと反して、非対称な権力による抑圧構造であったことを検討する。そこでは“愛”の精神性そのものが権力という政治的視点によって糾弾される。そして最後に5では、2から4までの展開において、親密性の内実そのものが明らかにされてこなかった事を課題として取り上げ、今後、どのような切り口から親密性の検討が望まれるかという課題を提示する。

## 2 社会史のアプローチ

### 2.1 親密圏=近代家族

“親密”な関係（親密性）、あるいはそのような関係性に媒介される空間としての“親密圏”概念は、多くの場合、近代家族と同一視されてきた。例えば、ハーバーマスは、“自由意思による両性の結合、愛の共同性による関係の持続、権威から離れた教養形成を柱とする小家族”を“市民家族”と呼び、親密圏とほぼ重なるものとして位置づけている<sup>3</sup>。セネットは、人間という動物は自身が社会的存在である為の手段として、“コスモポリタンの”あるいは“パブリックに”振る舞おうとする“礼儀の欲求”と、“自分の自然の姿を実現”したいという“自然の欲求”を満たそうとしてきたとし、この“自然の欲求”すなわち“親密性”の縮図を“家族”に見出した<sup>4</sup>。

このように、近代家族を中心とした親密性・親密圏論の展開は、①血縁関係・婚姻関係・地縁関係を中心とした“共同体的関係”、②市場と国家の発展により発達する、よく知らない他者との匿名的関係である“システム上の関係”、そして、③共同体的関係とは異なり、自発的な選択に基づいた関係である“自発的親密性”の3つの段階によって捉えることが出来る<sup>5</sup>。そして、このような段階によって捉えられる親密圏・親密性に対して、社会学では“疎外論”、“私化批判論”という2つの立場がとられてきた<sup>6</sup>。“疎外論”は、社会関係の変化を①の“共同体的関係”から②の“システム上の関係”への変化という枠組みで捉えるものであり、①“共同体的関係”と③“自発的親密性”を区別せずにそれらを“パーソナルな関係とインパーソナルな関係”の二分法的な図式で捉えているものである。そして、親密圏における共同体的な“人間らしい”関係が、社会の合理化あるいはシステム化により侵食され、“非人間的な/意味を剥奪された”関係が支配的になってきたとして、親密性を肯定的に捉えている。このような立場を取る論者としては、消費社会の進展によってファーストフード・レストランのような合理化されたシステムが、パーソナルな関係を崩すことを危惧する“社会のマクドナルド化”批判が挙げられる<sup>7</sup>。

一方で、“私化批判論”においては、疎外論的立場とは異なり前述のような二分法的な図式に立脚して居ない。私化された世界に対置されるのは、多くの場合“公共性”である。例えばセネットは、

“親密さのイデオロギー”とは“あらゆる種類の社会関係は、それが個々の人間の内的な心理的関心に近づけば近づくほど真実で、信頼でき、真正なものである”とする“ナルシシズム”的な価値理念と定義し、このようなイデオロギーが重視されることで“非個人性、疎外、冷ややかさ”を備えた公的世界での経験の全てが有害視されることを問題視している<sup>8</sup>。このように、“私化批判論”は、現代人が公的な世界から撤退し、親密性の殻に閉じこもってしまうとして、親密性の価値に対して批判的な見解を示す。

また、アーレントのように“近代が親密さを発見したのは、外部の世界全体から主観的な個人の内部へ逃亡するためだったように見える<sup>9</sup>”と指摘し、経済原則に侵された“社会”領域によって公的領域が侵食され画一化されようとするその圧力から逃れる為に親密性が生成したとして、“疎外論”“私化批判論”のいずれにも分類されるような論も展開されている。

本節で概観してきたように、社会史のアプローチにおいては、親密性は近代家族と等値され、“公共性”あるいは“市場”の対抗概念・評価軸として位置づけられてきた。その為、このアプローチでは親密性が主たる研究の対象とされることがや、親密性独自の意義や内部構造が明らかにされることはほとんど無かったと言えよう。

## 2.2 “性・愛”としての“親密性”

このように“公共性”あるいは“市場”の対概念としての“親密圏”は、前者を支える役割としての後者という関係で捉えられる。本節では、前節で述べた“疎外論”に軸足を置きつつも、親密圏の内部から“親密性”を詳述しているA. ギデンズの論考を基に、親密圏＝近代家族の成員間がいかなる要素によって結びつけられてきたかを整理する。

ギデンズは、近代社会における親密性の特性を“脱埋め込み”と“再帰性”という概念を軸に論じている。“脱埋め込み”は、近代以前の伝統的社会において共同体的親密性が保持されていたのに対し、近代以後、その共同的な社会関係がローカルな脈絡から切り離されることを意味しており<sup>10</sup>、“再帰性”とは“社会生活を記述するために導入された用語が社会生活のなかに入り込むと、社会生活そのものを変容していく<sup>11</sup>”作用を指す。前近代の伝統的社会では過去が尊敬の対象とされ、

伝統を通して行為の“再帰的モニタリング”がなされ、それが共同体の自空間と結びつくことにより連帯関係が維持されてきた<sup>12</sup>。しかし近代以降、それまでの諸価値が、ただ伝承されてきたものであるという理由だけでは伝統を正当化することは出来ず、伝統それ自体によってはその信憑性を検証できない知識に照らしてのみ、正当化が可能となる。近代化の進展によって、共同体的親密性は“脱埋め込み”され、個人によって“自発的に再埋め込み”される情緒的・感情的靱帯による親密性へと変容してきたのである。

このように、ギデンズは近代化に伴う親密性の特徴を捉えた上で、その親密性の端的な例として、“ロマンティック・ラブ”という“心的態度”を挙げる<sup>13</sup>。一般的に“ロマンティック・ラブ”は“愛・性・結婚”の三位一体を象徴するものとして大きく指定されるが、ギデンズは“ロマンティック・ラブ”を“相手との間に永続性のある感情的きずなを、その感情的きずなそのものが本来もつ特質を基盤に確立できる<sup>14</sup>”という想定の上に成り立っており、その心的態度の内部は“情熱恋愛”と“再帰的自己自覚的達成課題”の複合的・補完的構造であると定義づけている。“情熱恋愛”とは、“愛情と性的愛着とがひとつに結びつい<sup>15</sup>”たものであるが、しかしそれは“その熱狂さの点で宗教的なものにもなりうるような”性質を持っている為に反社会的な危険性を伴っている<sup>16</sup>。この“情熱恋愛”の反社会的側面は、“未来に向けて筋のおった叙述をおこなうために、(中略)過去の感情的再構成を必然的に伴うこと”、すなわち“一人ひとりの生に物語性という観念<sup>17</sup>”を付与していく“再帰的自己自覚的課題”によって持続的・安定的なものへと変化させられるのである。このように、“ロマンティック・ラブ”とは、“性的愛情”の不安定的性・危険性が、結婚や家庭といった“崇高な愛情”の再帰性と相補的關係になることによって、持続的な親密性としての役割を果たしてきたのである。

しかし、ギデンズは“ロマンティック・ラブ”は、親密な関係性が備えるべき“本質的な条件”とは矛盾するものであることを以下のように指摘する。

“家父長制家族(筆者注:近代家族と同意味)は、もちろん、男性による経済的支配を反映していました。しかし、家父長制家族の感情面での不平等

も同じように重要であると、私は思います。家父長制家族は、男性のセクシュアリティに中心的役割を配分し、貞潔な女性だけをさまざまな範疇の墮落した女性たち—売春婦や情婦、遊女—から区別してきたのです。このような分裂した見方は、対等なコミュニケーションをとおして形成される関係性と、明らかに両立できません。“親密性”は対等なコミュニケーションが達成されている場合、関係性における平等を言外に意味しており、この（今日、具体的には愛情関係を指すために用いられる）関係性という言葉もまた、この親密性と同じ種類の一連の観念や行為の中で使われる表現として、比較的新しく出現したのです<sup>18</sup>。”

ここで強調されているのは、婚姻関係及び家族関係には、親密性が前提としている平等性が担保されておらず、愛という言葉で表現される男女の関係性はそのような不平等さを含みつつ、その関係性こそが親密なものであるというイメージを担ってきた、ということである。そして、このような矛盾が“ロマンティック・ラブ”による連結ではなく、現代人に“純粋な関係性”を求めるように仕向けるようになったと述べる。“純粋な関係性”とは、“社会関係を結ぶというそれだけの目的のために、つまり、互いに相手との結びつきを続けたいと思う十分な満足感を互いの関係が生み出しているときみならず限りにおいて関係を続けていく、そうした状況<sup>19</sup>”であり、関係の希薄化や破綻とも捉えられるような関係を含む親密性の多様化現象を指す。

“かつて愛情は、ほとんどの性的に“正常な”人びとにとって、婚姻を介してセクシュアリティと結びついてきた。しかし、今日、愛情とセクシュアリティは、純粋な関係性を介して一層強く結びついている<sup>20</sup>。”

ギデンズはこのような性を、“自由に塑型できるセクシュアリティ”、“分散化したセクシュアリティ”、つまり生殖という必要性から解放されたセクシュアリティとして捉え<sup>21</sup>、かつて“ロマンティック・ラブ”や家族の情緒的鞆帯であった“性-愛”とは異なる親密性の在り方として提起している。

しかしこれまで見てきたように、ここで概念化されている“愛”がどのような行為に付随する感

情現象であるのか、あるいはその感情は必然的なものであるのか、“愛”は具体的な行為としては表層化されないのか、といった事については明示されていない。ギデンズは、“ロマンティック・ラブ”及びその変容形態としての“純粋な関係性”の両者ともに対し、その内部構造を“性”と“愛”として措定していたことから、親密性そのものを当為のものとして認識していたのである。

ギデンズは、親密性の内部において衝動的な性と再帰性としての愛が結びつくことで、家族、結婚という親密圏が維持されてきたことを明らかにし、それが親密性という本来の性質から鑑みた時に必要な要素を欠いていたために、現代が“純粋な関係性”を求める刹那的・一時的な関係を築く傾向にあることを指摘した。しかし、ギデンズは性を実態として、愛を再帰性の感情的側面として短絡的に捉えている傾向があり、親密性が本来持っているべき性質の中に、持続性の部分が捨象されている点は否めない。

### 3 家族社会学的アプローチ

#### 3.1 近代家族史と親密性評価

前述のように、公-私という対比下での親密圏の増幅、あるいは親密圏のシステム化が問題視されるのに対して、フィリップ・アリエスを嚆矢とする近代家族研究では、個人が家族という単位に属することで理想化・規範化されていく点が問題にされている。アリエスは、中世ヨーロッパ社会では“子ども期”という概念がなく、子どもは“小さな大人”として扱われていたこと、しかし近代化の道程とともに子どもへの情緒的な意識が形成され、無垢な対象として教育やしつけの必要性が説かれていく過程を紐解いている<sup>22</sup>。そして子どもへの視線や関心が増大することによって、その関心を中心としたひとつの諸関係のまとまりとして家族という関係に当為性が与えられたとして、近代において“勝利を収めたのは個人主義なのでなく家族なのである”と述べる<sup>23</sup>。

情緒性意識の喚起によって子どもを中心とした家族単位が普遍化されていくというアリエスの研究に続き、“男女関係”、“母子関係”、“家族と周囲の共同体との間の境界線”の3つの側面から考察したのがエドワード・ショーターである。ショーターは、前近代社会では情緒的な関係が、家族とくに夫婦間で抑圧され、近代化とともに解放されたという立場をとる。そして、配偶者選択の基準

が家産の維持や労働力確保といった手段的要因から“ロマンティック・ラブ”に移ったこと、母性愛が“発見”されたこと、そして共同体の仲間との絆より家族愛が優先するようになったことによって、家族が相互に感情移入し“魂の交流をつくりあげてきた”と述べる<sup>24</sup>。このように、愛という近代的感情が自発性と解放のメルクマールとされる家族の心性史研究によって、家族間の親密性の中心に様々な愛—“恋愛”“家族愛”“母性愛”—が位置づくようになった。

このような流れを受けて、日本における家族研究者は、戦前の家族制度が人間相互の健全な自立や主体性の成長を阻害していたとの認識と反省から、近代家族への変革を通して社会の民主化を果たそうとする価値志向を持つようになった<sup>25</sup>。例えば、具体的なパラダイムの変遷として柚井孝子は以下のように述べる。

“これまでは直系家族制から夫婦家族制へという変化が、実態としてのみならず、向かうべき目標として提示されてきた。すなわち、一方の極には家長が絶対権をふるう“家”が、他方の極には夫婦の愛情に基づく夫婦家族が位置づけられる。

(略) 高度経済成長期以前に書かれた家族に関する書物には、一日も早く封建遺制を払拭し、民主的な家族を築くことの必要性が力説されていた<sup>26</sup>。”

柚井の指摘通り、1970年頃までの日本の家族社会学者の間では、民主的な家族を守るという問題意識が強く、近代家族像が有す親密性が肯定的評価を受けることで、家族の病理現象といった問題の原因も、封建的な家制度から核家族への過渡期ゆえに不安定性が目立っているだけだという論調へと還元されてきた<sup>27</sup>。しかし、1980年代に入って家族の多様化論・個人化が指摘されるようになると同時に、愛を中心とした親密性への歴史的評価に変化が生じる。70年代までの“解放としての愛”から、“家族に関わる矛盾の隠蔽としての愛”といった抑圧、規制としての親密性を析出することが研究の目的となってきた。そして、家族の近代化は“感情を解放したように見せかけながら、家族の感情に関する規範やイデオロギーによって感情に対する規制を強めたのではないだろうか<sup>28</sup>”として、親密性の抑圧的役割が考察されるようになった。このように、家族史は近代家族像を

“排他的親密性<sup>29</sup>”の場として位置づけてきたのであった。

### 3.2 家族の精神的靱帯としての“愛”

近代家族内の親密性を象徴する“愛”のシンボルは、ギデンズがそれを“性”に付随する感情現象と捉えていたのに対し、家族社会学では、家族内部で個人が持つべき精神性という規範的イデオムとして捉えられてきた傾向がある。

山田昌弘は“家族であれば、愛情が湧くはずだ”という思い込み”が近代家族を支える装置となってきたことを指摘する<sup>30</sup>。また、そういった愛情イデオロギーが蔓延することによって、家族内における愛情の欠如が家族の欠陥として見なされるようになったことから、近代家族を“愛情をあおる装置<sup>31</sup>”と捉える。

また山田は、この“愛情”の構造について“見たい、聞きたい、さわりたい”などの“～したい”といった欲求から生み出される“コミュニケーションとしての愛情”と、“～の行為・基準”をクリアすると“愛情”のラベルが手に入る（“～することによって愛情が手に入る”）という、“記号としての愛情”に分けることができるという<sup>32</sup>。例えば近代社会では“本当の恋愛＝結婚”と定義することによって、“家族の外部に発生した感情体験を、すばやく家族の内部に回収<sup>33</sup>”し、またそれらの愛情が、個人が正当な感情の持ち主であるという自己証明へと転換されるといった“記号としての愛情”が積極的に使われるようになったのである。そのことによって、“コミュニケーションとしての愛情”の不安定性が回避されて行くばかりでなく、近代社会秩序を支える役割を果たしてきたと主張する<sup>34</sup>。

また、デビット・ノッターは、ギデンズが示したような“性-愛”としての愛情の図式を用いて、“性”の反社会的側面が、“聖”なる心性としての“愛”あるいは“聖”なる“純潔性”としての宗教的精神性と結びつけられることで、“性-愛”が愛情として社会秩序を安定させるものとなると論じる。そして宗教的精神性に位置づけられた“愛”は押しつけられた規範というよりは、逆に、自らが追及すべき価値にまで至った、と分析する<sup>35</sup>。また、“愛”の規範的性質について、宮森は以下のように論じている。

“保守と革新という構図が崩れつつある現在、

こうした（引用者注：親密性の民主制側面と抑圧的側面のこと）二重構造は見えにくくなってゆくと思われる。しかし、保守サイドが恋愛の破壊性を非難しながら家庭成員の快楽を重要視し、革新サイドが家制度の抑圧性を非難しながら家庭の型の生理必然性を強調するというかたちで、相互の家庭像の“過剰さ”を非難してきたことは、近代家族の枠組み自体が孕んだ過剰さのひとつの端的な表出であるように思われる。そこでは、型にはめる代償に快楽と愛が与えられるかのようである。抑圧と快楽・愛は一体のものであり、人間は無抑圧化での快楽や愛を想像し得ないという前提に立っているのではなからうか。“家族らしさ”の外形にとらわれて“本当の”“自然な”愛情の交歓がおざなりにされている、という感情が盛んに吐露されながら、その感覚を満たす家族（親密圏）認識を、われわれは実は想像することすらできてはいないのではなからうか<sup>36</sup>。”

このように、近代家族論においては、愛情は“性的行為とそれを規制する“愛”という精神の関係として捉えられている。

## 4 フェミニズムによるアプローチ

### 4.1 親密性批判としてのフェミニズム

近代家族研究の議論が、愛情という抑圧構造を問題視しながらも、あくまでも家族という単位に適応していくことに結論を見出しているのに対し、フェミニズムでは、親密性の性質そのものを親密圏の行為内在的に糾弾してきたといえる。フェミニズムは、既存の社会理論がほとんど“男性の近代社会の社会経験の理論化”であったとし“私的領域の経験”を当事者の視点から理論化しようとしてきた<sup>37</sup>。女性の個としての自立や男女平等を第一義的課題に掲げるフェミニズムにとって論敵となったのは、自然的・必然的な生物学的性差によって女性が親密圏を担うべき存在であるというフロイト的な心理学説であった<sup>38</sup>。このように、親密圏および近代家族を担う当事者の立場から、その領域を性に基づく権力構造という政治的視点で読み解くことで理論化することが試みられてきたのである。

フェミニズム研究の歴史の変遷は3つの時期に分けることが出来るが、女性性という視点から親密性への問題提起がなされるようになったのは、第2期フェミニズム以降であった。戦後から1960

年代までに展開された第1期フェミニズムでは、公的領域における女性の平等、男性と同様の権利の獲得を目指す“形式的平等”が目的とされ、自然的な領域として当為視されてきた私的な分野に関心が向けられることはなかった<sup>39</sup>。続いて、1970年代における第2期フェミニズムでは、リベラル・フェミニズムとラディカル・フェミニズムの2つの系譜が存在するが<sup>40</sup>、前者が第1期と同様、公的領域を議論の対象とするのに対して、後者は“個人的なことは政治的なことである”というテーゼの下、“権力の汚染”から免れた領域として位置づけられてきた家族関係・性関係などの個人の肉体的世界に、女性の抑圧構造を見出す<sup>41</sup>。具体的に問題視されたのは、「夫は仕事・妻は家庭」の近代型性別役割分担であり、当たり前だと思われてきた“主婦”役割そのものであった<sup>42</sup>。このように、ラディカル・フェミニズムは、近代家族を筆頭として、社会が正常と見なす構造そのものを疑問視し、第1期の指摘した資本的不平等に加え、家族内の家父長制に闘いを挑んだのである<sup>43</sup>。

そして、1980年以降の第3期の女性史では、第2期のフェミニズムが示してきた、“女性の自己実現を妨げるものとして、女性を権力構造の抑圧者であると位置づけ権力構造を糾弾する”姿勢に対して疑義が提起する。性別役割に固定化される単一的なアイデンティティを付与されることに反発する点では、第2期と同様であるが、第2期のような被支配者としての自覚を持たない点で、“個人主義的”反フェミニズムと解釈されることもある<sup>44</sup>。第3期フェミニズムは、非抑圧者という受動的な客体としての女性から、抑圧を“自律”として読みかえることで、親密圏が抑圧と解放の両義的側面を持っていたことを明らかにしたのである<sup>45</sup>。

このように、親密性はその内部から、フェミニズムによって批判的眼差しを向けられてきた。それだけでなく、1970年代からフェミニズムの学問上に取り入れられた“ジェンダー”概念は“社会的・文化的性別”を指し、生得的な“生物学的性別”に対抗的に措定することで、男女の2元的差異に収斂出来ない性的アイデンティティを持つ者も研究対象として含んだ、親密性の多様性を発見することを企図した<sup>46</sup>。このようなフェミニズム史、あるいはジェンダー史観の展開は、そもそも親密性そのものが異性愛を中心とする家族に限定されるようなものではないことを示していると言

えよう。

## 4.2 “愛”批判の手段としての“性”

親密性の批判を私的領域の権力構造の是正に求めてきたフェミニズムは、“愛”や“自由”といった普遍的価値理念に懐疑的見解を示す。ギデンズや近代家族社会学が“愛”という感情を一定程度認めているのに対して、フェミニズムは“愛”を家族内における“性支配”を正当化する為のイデオロギーとして捉える。江原由美子は、“性支配”を“恋愛・性愛・感情生活・私生活など、これまで個人の内奥に秘められ犯すべからざる内面領域とされてきたことそれ自体の中に、(権力の)維持構造が埋め込まれている”事とし、“それらを犯すべからざることとすること自体が、性支配の維持に貢献しているのである”と述べる<sup>47</sup>。そして“主観性・個人的経験・感情・私生活は、社会から切り離され、権力の汚染からまぬがれた領域なのではなく、それ自体社会が産出する装置なのであり、その装置の中にこそ権力作動の回路が存在する”と論じ、その原因を近代合理主義が、感情、内面的領域、情緒を女性に割当て、女性を市民社会から排除してきたこと、女性を近代家族の中に内閉してきたことに見出す<sup>48</sup>。

このような女性の社会状況に打開する為に、フェミニズムは“家事も労働である<sup>49</sup>”という論点を提起したが、この論点によって皮肉にも逆照射されたのは、女性自身が“愛”という無償性と献身の名において家事を“神聖さ”と救い出そうとする姿勢であった<sup>50</sup>。フェミニズムは“愛”を、労働を不可視化させる為のイデオロギー装置として批判し、そのイデオロギーが夫を含む家族成員の目的を女性が自分の目的として献身と自己犠牲を憑憑する機能を持つことを指摘した。

このように既存の社会構造の変革の方途を“性”の視点から見出すことによって、フェミニズムは愛を権力作用として捉え、愛こそが自己の正当化基準となってきた社会史、家族史の展開とは異なり、性にこそ自己の正当化基準を求めたのであった。

## 5 近代家族≠親密圏のアプローチへ

前節までは、親密圏とその内部での親密性について3つのアプローチを並置してきた。本節では、これら3つを総括し、その上で親密性研究がどのようなアプローチを取っていく必要があるのかを

考察したい。

本稿で取り上げた各アプローチは共に、社会の近代化に応じて生成してきた近代家族を親密圏概念と一致するものと捉えていたが、一方でその場を媒介する親密性の点で異なる理論を展開してきた。まず、“システム”あるいは“公共性”の普遍的性質に対して、親密圏の特定の共同体的な性質は対極的に捉えられ、両者は共通性を持たない空間として定義されてきた。そして、ギデンズの論考を参照することで、親密性は“性”の衝動性に“崇高な愛”という安定性が一体化されることで“正常な性”を担保する役割が加味され、“愛”という感情が両者の矛盾する性質を取り込んだものとならざるを得なかったことを概観した。次に、“家族社会学アプローチ”では、家族間の“愛情”は自発性を尊重するものではなく、“愛情”が抑圧的な秩序として近代人を規制してきたことが明らかにされた。ここでは特に、精神的・理念的側面としての“愛”が実態を先導、隠蔽していくイデオロギーとして解釈される。そして、最後に“フェミニズムアプローチ”では、性に主眼が置かれ、親密圏並びに親密性そのものが性支配の脅威として捉えられる。

3つのアプローチはそれぞれ注目する視点が異なっているが共に、近代家族的な従来の親密性が、自発的な感情に基づくものであるという前提を再定義あるいは覆そうとしてきた。しかしこのような、既存の親密性へのアンチテーゼあるいはその解体を目的とした親密性論は、人が他者と関係を持つ時に持たざるをえない他者との関係性、つまりどのような必然性から人は他者との共生を必要とするか、という関係性を論じる時の準拠点を失ってしまったのではないかと思われる。では、親密性研究にいかなるアプローチが必要かを提示する為の4つの課題を示したい。

第1に、これまで整理してきたように、従来、親密圏は男女の性愛によって形成・維持される私的な小家族に還元されてきた。しかし、フェミニズム的アプローチやジェンダー史の生成といった展開からも、親密圏=私的領域=近代家族という根強い等式を問題視し、親密性を近代家族から切り離した上で議論をする必要性が浮かび上がってくる。

第2に、3つのアプローチは共に親密性を検討する際に、男女を対とする親密性への着目が主となってきたため、その関係性に存在する“性-愛”

の両者が不可分と捉えられてきた点が挙げられる。“性”に媒介される衝動的な関係性はギデنزが“純粋な関係性”概念において指摘しているように、その関係性を結ぶ対象者が現在において婚姻と結びつかなくなったという意味で、特定の個人に限定されない。一方で、“愛”はこれまで、持続的・永続的かつ特定の相手との関係性を指し示すものとされてきた。しかし、この愛は、親密になる“理由”よりも“結果”に力点を置く、自己準拠的な基準によって、ある関係性を親密なものであると正当化するシンボルであった。つまり、“性”と“愛”を分割し、“性”を介した相互関係の性質及び“愛”の行為体的側面が検証される必要がある。

第3に、親密性という概念自体の政治性が明確にされる必要がある。近代家族＝親密圏という等値構造にも明らかであったように、ある特定の関係性を親密であると定義した場合、その関係性への肯定・否定のいずれかに終始してしまう。“愛”が自発性を象徴するものであったにもかかわらず、それが人びとの行為の正当性を判断する基準となってきたことを鑑みても、親密という価値判断そのものを再考しなければならない。

第4に、1から3において前述したような視点から親密圏、近代家族を捉えなおすことは、それを前提としてきた様々な領域や価値観の再考を迫ることになる。例えば、近代家族＝親密圏は近代公教育システム確立の前提となってきたし、公教育に限らず社会教育・生涯学習においてはそれが“私的領域にわたる行為を広く含んで<sup>51)</sup>”いることから、親密性の問い直しが必要とされるであろう。本稿で具体的に考察することが出来なかったが、今後、親密性の内部から教育ひいては社会教育を議論することが望まれる。

1 三品（金井）淑子“新たな親密圏と女性の身体の居場所”＜川本隆史他『共に生きる』（新・哲学講義6）岩波書店,1998＞p.78.

2 ルソーに関しては、上野千鶴子『家父長制と資本制—マルクス主義フェミニズムの地平—』岩波書店,1990, p.163-167を参照。コンドルセに関しては、Groult Benoîte『フェミニズムの歴史』[*Le féminisme au masculine*, R. Laffont,1982,]山口昌子訳,白水社,1982,p.68を参照。

3 Habermas,Jurgen.『公共性の構造転換』[*Strukturwandel der Öffentlichkeit* :

*Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*. Hermann Luchterhand Verlag,1962,] 細谷貞雄訳,未来社,1973, p.69.

4 Sennett, Richard.『公共性の喪失』[*The Fall of the Public Man*, Cambridge University Press, 1977,] 北山克彦・高階悟訳,晶文社,1991, p.37.

5 筒井淳也『親密性の社会学—縮小する家族のゆくえ—』世界思想社,2008, p.14.

6 *Ibid.*,p.15.

7 Ritzer, George.『マクドナルド化する社会』[*The McDonaldization of society*, Pine Forge Press, 1996,]正岡寛司訳,早稲田大学出版部,1999を参照。

8 Sennett, Richard. *op.cit.*, p.309-310, 361.

9 Hannah, Arendt.『人間の条件』[*The human condition*, University of Chicago Press,1958,] 志水速雄訳,2009, p.98.

10 Giddens, Anthony『近代とはいかなる時代か? : モダニティの帰結』[*The consequences of modernity*, Polity Press, 1990,]松尾精文・小幡正敏訳,而立書房,1993,p.35-36.

11 Giddens, Anthony『親密性の変容 : 近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム』[*The transformation of intimacy : sexuality, love and eroticism in modern societies*, Polity Press , 1992,]松尾精文・松川昭子訳,2006, p.49.

12 Giddens, Anthony『近代とはいかなる時代か? : モダニティの帰結』*op. cit.*, p. 53-55.

13 Giddens, Anthony『親密性の変容 : 近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム』*op.cit.*, p.12.

14 *Ibid.*

15 *Ibid.*, p.62.

16 *Ibid.*

17 *Ibid.*, p.64.

18 Giddens, Anthony.『ギデنزとの対話 : いまの時代を読み解く』[*Conversations with Anthony Giddens : making sense of modernity*, Polity Press, 1998,] 松尾精文訳,而立書房,2001,p.187.

19 Giddens, Anthony『親密性の変容 : 近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム』*op.cit.*, p.90.

20 *Ibid.*

21 *Ibid.*, p.13.

22 Ariès, Philippe.『〈子供〉の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』[*L'enfant et la vie Familiale sous L'ancien Regime*, Editions du Seuil,1973,] 杉山光信・杉山恵美子訳,みすず書房,1980を参照。



- 23 *Ibid.*, p.381.
- 24 Edward, Shorter. 『近代家族の形成』 [*The making of the modern family*, Basic Books, 1977,] 田中俊宏他訳, 昭和堂, 1987, p.16.
- 25 牟田和恵 “家族の社会史から家族社会学へ—アプローチの統合をめざして—” 『家族社会学研究』 第3号, 1991, p.51.
- 26 柚井孝子 “いま家族に何が起こっているのか—日本の家族の今を問う—” 『家族社会学研究』 第2号, 1990, p.5.(5 ページ)
- 27 山根常男 「現代家族の構造と病理」 <大原健士郎・岡堂哲雄編 『現代人の異常性 現代家族と異常性』 (現代のエスプリ別冊) 至文堂, 1976 > p.7-18.
- 28 山田昌弘 『近代家族のゆくえ—家族と愛情のパラドックス—』 新曜社, 1994, p.103.
- 29 宮森一彦 “「家庭の和楽」と「家庭の親愛」—近代日本における排他的親密性の形成をめぐる—” 『社会学評論』 第54巻第1号, 2003, p.3.
- 30 山田昌弘 『近代家族のゆくえ—家族と愛情のパラドックス—』 *op.cit.*, p.214.
- 31 *Ibid.*, p.10.
- 32 *Ibid.*, p.98.
- 33 *Ibid.*, p.133.
- 34 *Ibid.*, p.134.
- 35 デビット・ノッター 『純潔の近代—近代家族と親密性の比較社会学—』 慶応義塾大学出版会, 2007, p.44.(44 ページのみ).
- 36 宮森一彦, *op.cit.*, p12-13.
- 37 江原由美子 “フェミニズム理論への招待” 『フェミニズム入門』 宝島社, 1988, p.13-14.
- 38 上野千鶴子 『差異の政治学』 岩波書店, 2002, p.4 及び Ortner, Sherry B. “女性と男性の関係は、自然と文化の関係か?” 『男が文化で、女は自然か?—性差の文化人類学』 [*Belief and the problem of women*, Cambridge University Press, 1974,] 山崎カヲル監訳, 晶文社, 1987 などを参照。
- 39 江原由美子 『装置としての性支配』 勁草書房, 1995, p.68.
- 40 荒木菜穂 “バックラッシュの時代における第3派フェミニズムの政治性” 『国際文化学』 第14号, 2006, p.53-54.
- 41 江原由美子 『ラディカル・フェミニズム再興』 勁草書房, 1991, p.47, 54-55.
- 42 上野千鶴子 『家父長制と資本制—マルクス主義フェミニズムの地平—』 *op.cit.*, p.197-198.
- 43 *Ibid.*, p.198.
- 44 荒木菜穂, *op.cit.*, p.47-62.
- 45 上野千鶴子 “歴史学とフェミニズム—女性史を超えて” <浅尾直弘・網野義彦・石井進・鹿野政直・早川庄八・安丸良夫編 『(岩波講座 日本通史 別刊 I) 歴史意識の現在』 岩波書店, 1995 > p.170-171.
- 46 上野千鶴子 『差異の政治学』 *op.cit.*, p.3-12.
- 47 江原由美子 『ラディカル・フェミニズム再興』 *op.cit.*, p.55.
- 48 *Ibid.*, p.54-55.
- 49 上野千鶴子 『家父長制と資本制—マルクス主義フェミニズムの地平—』 *op.cit.*, p.31.
- 50 *Ibid.*, p.39.
- 51 佐藤一子 『現代社会教育学—生涯学習社会への道程—』 東洋館出版社, 2006, p.64.

# **Studies on the Structure of “Intimacy”**

## **Focusing on “Love” and “Sexual Intimacy”**

Yuka NAKAMURA<sup>†</sup>

<sup>†</sup> Master Course, Graduate School of Education, the University of Tokyo

The paper considers the relationships between the modern family and intimacy analyzed by “love” as a symbol of emotionality. When most researchers discuss the theory of the private and intimate sphere, they regard that sphere as a modern family. So, the notion of “intimacy” is often equal to the ties of the members in a modern family. Intimacy such as “affected family and conjugal affection” gives the image as freedom, peace and stability. But, a recent paper considers the considerable problems such as the individualization and diversity of family forms. As above mentioned, intimacy has been given a positive image and a negative image. In this article, the sociological approach, family historical approach, and the feminism approach are mentioned, and analyzed from two sides as “sexual intimacy” and “emotional intimacy”. Through these analyses, we know that “sexual intimacy” has an impulsive and unstable nature, while on the other hand, “emotional intimacy” has vitality and a stable nature. Both are reciprocal compliments.

In this paper, I not only give the positive or negative image, but present the way of approach about why people have intimacy and what elements form that connection.

Keyword: Intimacy, Modern Family, Love